

## シエイク

一緒にモスクに行つてからというもの、スルタンは頻繁に電話をかけてくるようになった。慎太郎は仕事を離れた親しいサウジ人が出来たのが嬉しかった。

今度は、スルタンが駱駝のミルクを飲ませてくれるという。リヤド近郊に牧場があり、そのミルクは新鮮で美味しいから是非飲ませたいということだった。

スルタンは、駱駝のミルクは牛乳より栄養があり健康にも良く元気が出ると言つて盛んに薦めていた。

慎太郎は、いつもの通りまず治安を考えてレジデンスから離れることにあまり気が進まなかったが、スルタンがあまりにも熱心だったので行くことにした。そうなると次第に牧場に行くのが楽しみになってきた。

その当日、朝四時頃にスルタンから電話があり眠りを妨げられた。信心深く、礼拝は励行していると思われるスルタン

からすれば四時頃は朝の礼拝をするためには当然起きている時間で自然な時間帯だったのだろうが、いつも六時過ぎに起きている慎太郎にとっては眠りが最も深い時で大変な迷惑だった。

慎太郎が文句を言う前に、スルタンは慎太郎の眠そうな声に気が付き先に謝って来た。

「ご免、慎太郎、まだ寝ていたのか。電話をしたのは、この間約束した時間を変更してもらおうと思ってね」

とスルタンは言った。

何もこんな時間に電話をして来なくても良いのではないかと思ったが、人の良い慎太郎は、彼はこの時間しかなかったのだろうと直ぐに思い直して自分を納得させた。

また、彼等の生活のリズムと自分の生活のリズムとの違いを思い知らされた。

「いいですよ。何時でも。あなたの都合の良い時間に変えてくれて結構ですよ。ところで、一体、あなたは一日に何時間

くらい睡眠を取っているんですか」

慎太郎は、それほど早くベッドに入っているとは思えない  
スルタンに聞いてみた。

「私の睡眠時間は、四時間もないよ。それじゃ、午後四時頃、  
君がレジデンスに戻ってすぐで申し訳ないがその時間に変  
えさせてくれ。また、私が迎えに行くから」

とスルタンは答えた。

慎太郎は、スルタンの睡眠時間の少なさには驚かされたが、  
恐らく、昼寝をするなどどこかでそれを補っているに違いな  
いと思った。慎太郎が、そのように考えていることを見透か  
したようにスルタンは続けた。

「ただし、暇な時間を見つけて寝ることもあるよ。一つは朝  
のお祈りの後、勤めに出るまでの短い間、後は、まあ普通の  
ことだが、昼寝だね」

などと笑いながら応えて来た。

「そうですね、それにしても、思ったより短い睡眠ですね。」

それで良く持ちますね。ところで、今回は、僕は僕の車で行くことにさせてもらいます」

スルタンは、この間の晩、無事レジデンスまで送ってくれたので十分に信用出来るとは思われた。しかし、自分が自由に動けなかったというもどかしさはあつたし、一抹の不安もあつた。やはり、念には念を入れ、既に、会社の車で行くことを決め、慎太郎はオスマに運転を依頼していた。

オスマは、行く先を聞いて来たが、慎太郎は、詳しくは知らなかったのでリヤド郊外に必要な時間は三時間程度としか言えなかった。

オスマは、一瞬、怪訝(げん)な顔をしたが、直ぐにいつもの笑顔に戻り了解した。慎太郎が特命を持っていることはオスマも十分に承知している。いつも、必要以上に踏み込まないよう心掛けていた。

また、慎重な慎太郎が危険なことをする筈がないと信じていた。

慎太郎は午後三時三〇分にレジデンスに戻るとオスマに

言った。

「今日は、サウジ人の友達と郊外の駱駝農場に駱駝のミルクを飲みに行く。彼の名前はスルタンと言って、宗教界に深い関係がありそうだ。この間は、シェイク・アリ・ムトラックを紹介してくれた」

慎太郎は、少しでもオスマを安心させようとして、そう言ってみた。これを聞いたオスマは目を丸くして驚いた。

「シェイク・アリと言えば、大変高名な方で、良く宗教関係の番組でテレビにも出ています」

オスマは、慎太郎が何時の間に、そのような偉い人物と知り合うことが出来たのか不思議だった。そして、そのアリの知人とあれば何の問題も無い筈だし、そのような人物に会えるのは光栄なことだと思っていた。

やがて、スルタンがまた愛車のカローラで、あの芳しい香りを漂わせて、やってきた。

レセプションのファハドは、慌てて迎えに出た。キーを預かり駐車をするつもりで出迎えたが直ぐに出かけると言わ

れたのだろう、スルタンの車を入口の前にある駐車スペースに止めるために誘導していた。

慎太郎は、ファハドに笑顔で挨拶をすると、オスマとともに表に出た。そして、オスマをスルタンに紹介し、スルタンの車に付いて行くことを告げた。

二台の車は、レジデンスを離れ、また、南の方向へとファハド大通りを下って行った。

車は、なかなか目的地に着かなかった。

慎太郎はだんだん不安になって来た。オスマの運転は信頼出来るし、彼なら暴漢の急襲を振り切って逃げることは可能だ。しかし、もしテロリストが自動小銃などで攻撃して来たら一溜まりも無い。この車は、林公使の車とは違って防弾ガラスを装着しているわけではない。

四〇分間ばかり走ったところで、スルタンの車は左折した。周りは既に家並みはなく一面土漠になっていた。

左折後しばらくは舗装道路だったが、やがて、でこぼこの土の道となった。車は時折大きく揺れた。時にごつんと車の底がぶつかる音がした。オスマは、車が痛むのではないかと心配し嫌な顔をしていた。スルタンの車はおかまいなしに上下左右に揺れながら走って行った。慎太郎は、ジープでもないので、こんな道を走るのは勘弁してくれと叫びたかった。これでテロにでもあつたら最悪だ。

心配して走っている内に、その道は行き止まりとなった。牧場というには草が少なかった。ただ、柵に囲まれた中に確かに駱駝が数十頭はいた。

スルタンは車を降りると、駱駝を飼育していると思われる汚れたトープの上に腰巻のようなものを巻いた男に声をかけた。牧場に雇われているのだろう、サウジ人であれば貧しいベドウィンのように見えた。肌は真っ黒だった。

小柄なその男は、スルタンに対し、まるで雇い主にでも話しかけるような丁寧な言葉でなにやら話していた。スルタン

は頻繁にここに来ているようで、その男とは親しそうにしていた。

スルタンは、その男に慎太郎を紹介すると、駱駝のミルクを慎太郎のところを持って来るよう頼んだ。

男は、駱駝の方に行くとき近くに置いてあった銀色のアルミ製の大きなボウルを取り、駱駝のミルクをそこに絞り出し始めた。相当に大きなボウルだったが、あっという間に一杯になった。それを手に持って慎太郎の方に近づいて来た。

そして、そのボウルを慎太郎の方に差し出した。

ボウルを覗き込んだ慎太郎には、白いミルクの中に小さな泡がたち、細かな草の切れ端が浮いているのが見えた。切れ端は恐らく、絞る前から入っていたのだろうが、男はそのようなことはあまり気にしないようだった。

慎太郎は、それがひどく不潔に思えて仕方がなかったので、暫くただ眺めていた。

それを見ていたスルタンは慎太郎に話しかけた。

「慎太郎、絞りたては美味しいよ。飲んでご覧」

それでも躊躇(ちゅうちょ)している慎太郎を見て、スルタンは、もう一度、勧めた。

「とにかく駱駝のミルクは健康に一番だ。サウジ人は皆毎日飲んでいる。ナタニヤという牧場直営の店では品質が良いのでサウジ人が並んで待っているよ。販売日は、土曜日、火曜日、水曜日の三日間だけだが、入荷するとすぐに売り切れになってしまう。ナタニヤの経営者は親しい友人だから、後でその店にも連れて行ってあげるよ。だけど、ここで絞りたてを飲むのにはとても敵わないね」

慎太郎は、リヤドに着いた直後に笠原に連れられて、駱駝のミルクを買いにやはりナタニヤという店の前まで行ったことを思い出していた。スルタンが言ったのは、あの店のことだろうかと考えていた。

慎太郎は、思い切って飲んでみることにした。絞りたてだから、腐っているわけではないしと清水の舞台から飛び降りるつもりで飲んだ。オスマは、ただ、ニヤニヤしながら慎太郎

がミルクを飲むのを見守っていた。

飲んでみて、慎太郎は美味しいと思った。

なんと滑らかな味だろう。そして、そのミルクの生暖いこと。これまで、冷蔵庫に入ったミルクしか飲んだことのなかった慎太郎にはこれも新鮮な驚きだった。

ミルクと言うのはこうやって飲むものかもしれないとその贅沢さに浸っていた。絞りたては駱駝の体温で暖かいのは当然のことかも知れないが慎太郎は感動していた。

スルタンは、その慎太郎の反応を見て満足気に話し掛けた。

「どうだね、絞りたての味は。格別だろう」

「最高です。これまでこのようにして飲んだことはなかったので、感動しました」

慎太郎は即座に答えた。

スルタンは、もっと飲むように勧めたが、慎太郎には、とても、ボウル一杯のミルクを飲み干すことは出来なかった。

「もういいのかい。それじゃ、残りを持ち帰ってレジデンスで飲んだら良いよ」

スルタンは、アラビア語で、男に残りを持ち帰ることを伝えた。

男は、大きなビニール袋を持ってきてそこにミルクを注ぎ始めたが、草の切れ端が入るのもお構いなしに全部入れてしまった。

慎太郎は、その大雑把さに呆れてみている。

スルタンはそれを受け取るとオスマに手渡した。慎太郎は、慌てて、スルタンに聞いた。

「有難うございます。それでは、いくら払ったら良いでしょうか」

「お金はいらないよ。それから、慎太郎、私達は友達だから、これからは遠慮なく気楽に話そう」

と言うと、慎太郎に今度は駱駝に乗らないかと勧めてきた。慎太郎は、駱駝の背が思ったより高く、近くでまじまじと見てみると、何とはなしに恐く見えたので丁重に断った。

スルタンは、それを微笑みながら聞くと、男に別れの挨拶をして慎太郎達を車の方に連れて行った。

車のところまで来ると、スルタンは、またディナーでもど  
うだと慎太郎を誘ったが、慎太郎は、ミルクを早く冷蔵庫に  
入れたいので今日は失礼したいとこれまた丁重に断った。

スルタンは特に気を悪くしたふうもなく、それでは、次の  
機会にでもしようと言って直ぐに引き下がった。

その時、ちょうど、遠く水平線に大きな赤い夕陽が沈み始  
めた。水平線は赤く染まり、そして、少しずつ紫色に変わっ  
て行き周囲は薄暗くなってきた。

スルタンは、その光景を眺めながら、もうすぐ礼拝だから、  
ファハド大通りまで送ったら失礼すると申し訳なさそうに  
言った。

慎太郎は、それで結構ですと言って、礼を言いながらオス  
マの車に乗った。

慎太郎は、今回は自分の車で来て良かったとつくづく思っ  
た。スルタンには訝しく思われたかもしれないが、自分の車  
で来れば自分の思う通りに行動出来る。

これからもこのようにしようかと心に決めた。

モスクに行ったり、駱駝のミルクを味わわせて貰ったりしている内に、慎太郎は、徐々にスルタンを信頼出来るようになって来た。もともとその人柄は気に入っていた。

スルタンも素直な慎太郎が余程気に入ったらしく、頻繁に電話をかけてきたり、慎太郎のレジデンスを訪れたりするようになった。

慎太郎は、治安上の理由から、自分が出かけるよりも、スルタンが訪ねてくれるのを歓迎していた。スルタンもレジデンスを気に入ってくれたようだった。

スルタンはサウジ人の尊敬をひとえに集めていた。

スルタンは、黒々とした口髭、耳まで繋がる顎鬚(あごひげ)を生やしていて、彼を見たものは皆口を揃(そろ)えてムタワではないかと慎太郎に聞いた。

スルタンはアブダラー秘書官と同様、欧米人のように目鼻立ちはくっきりとしていたが、付き合ってみるとアブダラーに比べ少し肌の色が黒いことに気付いた。

スルタンがそこにいるだけで人々は安心し、彼を称え、そ

して彼の話に熱心に聞きいつていた。彼はコーランを端々まで憶えていて、どのような質問にも適切に応えられた。その対応で人々はさらに彼を尊敬するのだった。

また、何人かでお祈りをする機会があれば、スルタンは必ずその場のリーダーとなっていた。

慎太郎はそのような彼を只者ではないと思っていたが、その素性を知ったのはごく最近のことだった。

石油省で最初に会ってから既に半年は過ぎようというのにスルタンのことを詳しく知らないというのはいささか妙ではあったが、これもサウジらしいと言えばサウジらしい。慎太郎も特に聞くことはなかった。用心深いサウジにはそれが却って良かったのかもしれない。

スルタンの素性を知ったのは本当に偶然だった。

慎太郎が用事で石油省に行った時に、たまたま、また、スルタンに会って親しく話をしながらロビーを一緒に歩いて

いた時のことだった。

石油省次官のプリンス・アブドルラフマンが歩いて来た。

慎太郎はプリンスを前にして緊張していた。

プリンスはスルタンを見かけると、にこにこして、親しげに、呼びかけたのだった。

「シェイク！」

慎太郎は、驚いて、耳を疑いながら、スルタンの顔を見た。

スルタンは涼しい顔でにこにこしながらプリンスと握手をしアラブ式の抱擁をした。そして、慎太郎をアブドルラフマンに紹介した。

「殿下、こちらは三友商事のミスター・イケナミです」

慎太郎は、突然のことで戸惑っていたが、なんとか挨拶だけはすることが出来た。

「殿下、初めまして。池波慎太郎と申します。本日は、お目にかかれて大変光栄です」

「初めまして、ミスター・イケナミ。アブドルラフマンです。  
サウジへようこそ」

プリンスが透き通るほど白い優美な手を差し伸べて握手を求めて来たので、慎太郎は身を硬くしながら握手に応じた。慎太郎は、その女性のように柔らかい手の感触をいつまでも忘れられなかった。その出会いは夢のように思えた。

「さつき、殿下は貴方のことをシェイクと呼んでいましたね」

「そうだね。別に隠していたわけじゃないんだけど、実は、我が家はシェイクの家系なんだ」

慎太郎は、スルタンから頼まれ友達らしい親しい口ぶりで話させてもらっていたが、シェイクと聞いて気楽に話すわけにはいかないと思った。

またもとに戻して敬語で話した方が良いのかもしれない。スルタンは、普通のサウジ人のようだったりシェイクだったり、慎太郎に対応を戸惑わせた。

「そうですね。前に、気楽に話してくれと仰っていましたが、

シェイクと聞いてしまうと、とても気楽には話せなくなりま  
した」

「慎太郎、頼むから、気にしないでくれ。これまで通り友達  
らしくしよう」

「たまたま生まれがシェイクの家系と言っただけなんだから。  
このナジド出身のエリートとは違うし。慎太郎は、知ってい  
るかな。サウジ南西部にアルバハという田舎の町があるんだ  
けど、私はその出身なんだ」

そう言われても、慎太郎は、やはり友達のように話すには  
躊躇した。しかし、スルタンの気遣いは有り難かったし、そ  
の気持ちには応えなければならぬ。

「有り難うございます。それでは、友達のようにさせてもら  
いたいと思います」

「その口調がもう駄目だね」

スルタンは、そう言って笑った。

「それでは、次からそうさせてもらいます」

「いや、すぐにそうしよう」

「はいはい、分かりました。それではそうしましょう」

慎太郎は、スルタンのお蔭で大分気楽に話せるようになった。  
た。

しかし、そんな簡単には緊張がとれる筈もない。

「それじゃ甘えさせてもらいます・・・」

「えーと、アルバハはアルバハ州の首都・・・だよな、」

「昔、一度通ったことがあります・・・いや、あるだったね、」

「スルタンは日本の伊豆のことは知らないだろうが、まるで伊豆の山々と言ったような雰囲気の風景明媚(ふうせいめい)びな景色が続いていたように憶えている。良い所だったね」

慎太郎は、しどろもどろになってしまつ自分がたまらなく可笑しかった。

「慎太郎の言う通り良い所だよ。タイフからの尾根道を真っ直ぐに高速一五号線・ヒジャーズ・ハイウェイがアルバハ、

アブハまで伸びている。タイヤは海拔一七〇〇メートル、アルバハは海拔二五〇〇メートル、そしてアブハは海拔二二〇〇メートル、真っ直ぐな道路は、アップダウンを繰り返しながら、徐々に緑の街へと上がって行く」

「スルタン、そう言われて鮮明に想い出した。僕は車でその道を走ったことがある。本当に真っ直ぐだった。走っていて、かなり遠くに長い登り坂が見えた。その坂を蟻(あり)のように小さく見える車が走っている。僕もあの坂を上るんだと思いながら、アクセルを一杯に踏み続けて猛スピードで走るんだけど、いくら走っても着かない。まるで、魔法の絨毯に乗って飛んでいるような爽快な気持ちがあったよ。日本ではアクセルを床にずっと付け放しで走るなんてことは到底出来ない」

「そう、慎太郎も爽快なドライブを楽しんでくれたか。でも、今は、残念なことに、時速一九〇キロ以上の猛スピードで競争する若者達がいたりして、“死の道路”なんて言われているんだ。毎年、数百人の交通事故死が発生している。ただ、彼等は、そうすることによって、ワッハーブの伝統を受け継ぐ厳格な宗教戒律、就職難、低迷を続けた経済などに対する欲求不満を解消していると弁護する人もいる。こんなところにも、この地方が経済的格差に悩んでいるという側面が顔を出しているんだ」

スルタンは、続けた。

「アルバハのことはおいおい詳しく話させてもらうつもりだが、このリヤドとは本当に相当の経済的な格差があってね。基本的に貧しいんだ。サウジでは、月収一七〇〇リヤル(約五万一〇〇〇円)以下、家族の総支出が一月に三〇〇〇リヤル(約九万円)以下だと貧困層と見なされるんだけど、そんな家庭が半数以上なんだ。中には、月収二〇〇リヤル(約六〇〇〇円)から四〇〇リヤル(約一万二〇〇〇円)しか無い最貧

家庭もある。貧しくて子供に高等教育を受けさせることが出来ない家庭も多い。やっと卒業させても、就職が保証されているわけではない。失業率もかなり高いんだ。また、持ち家比率も低い。借家住まいのものが半数以上で、貧困層の中には一部屋に一〇人以上で生活しているケースもある」

慎太郎は、あの九・一一(ニューヨーク同時多発テロ)のテロリスト十七人の内サウジ人が一五人で、その一五人の内一人までもがサウジ南西部の出身であることを想起していた。

慎太郎も経済格差があることを知ってはいたが、スルタンからアルバハの貧しさを具体的に聞いて、思ったより格差が大きいことに驚かされていた。

大王の香水師ハツサンは、ロイヤルファミリーに比べれば、大した収入ではないのだろうが、それでも、アルバハの最貧層とは、天と地以上の差がある。

ファイサリア・レジデンスに暮らす人間は、皆雲の上の存在だ。イブラヒムのような人間もいる。特に、この数年、リ

ヤドには富が流入し、それに群がる人間が世界中から集まっ  
て来ている。

基本的にリヤドは豊かだ。

「隣のアシール州の知事、ハリド殿下は、故ファイサル元国  
王のご子息で、ワッハーブの流れを組む私の家系とも近いの  
で特別親しくさせてもらっている。殿下は、観光開発に力を  
入れて地域振興を図っているんだけど、なかなか成果があが  
らなくってね。私もなんとかしなければと思っているんだ。  
ただ、こここのところ、石油価格が上昇して石油収入が増大し  
たので、少しは改善するのかなと思っている」、「  
「アルバハやアシールの人は、皆人柄は良いし、民度は高い  
んだ」

確かに、シバの女王で有名なイエメンは歴史も古い、アル  
バハ、アブハはその延長線上にある。アシール、アルバハな  
どサウジ南西部の民度は高いだろう。これらの地方は、古代  
ローマ人からもアラビア・フェリックス(幸せなアラビア)と  
言われたほど、アラビアの中で最も住みやすい地域でもあつ

た。

サウジのロイヤルファミリーは、スルタンのような地方豪族を尊重していた。しかも、彼の部族はサウジ伝統のワッハーブ派の流れを受け継いでいるということだから尚更だった。

ワッハーブ派の始祖はモハンマド・イブン・ワッハーブで、彼はコーランとスンナにもとづく純粋な古典イスラム、聖法の厳格な適用に復帰しなければならぬと主張した。このような原理、原則に戻れという主張は、当時のイスラムがこれを逸脱しているとの認識に基づくわけだから、主流派からは迫害され易く、これを覆すためには同じ考えを持つサウド家の力が是非とも必要だった。

こうして 一八世紀半ばにサウド家とワッハーブは盟約を結んだ。

ワッハーブは復古主義的改革者イブン・タイミーヤ思想の熱烈な支持者でコーラン・スンナの文言をそのまま肯定し、

それに対する一切の解釈や詮索を否定し、それに矛盾するすべての行為や慣行を排除し否定しようとするハンバリー法学派の流れをくんでいた。

今日のサウジ統治基本法は、この流れをくむワツハーブ派の教理とサウド家の支配の正当性を強調し、国民に統治者への服従義務を強く求めている。

ただ、これは諸刃の剣で、その考え方はイスラム原理主義にも極めて近く、沙漠のサソリのような強硬派のサウド家非難の理屈ともなっていた。

サウド家は伝統としてその教えを厳守して来ているものの、当然のことながらイスラムの厳格な運用、適用状況を常に示し、国民にそのように納得させなければならないことになる。

スルタンはサウジのロイヤルファミリーにとっても大変重要な存在だった。特に、アルバハ、アシールでは、主要部族の多くがサウド家によりワツハーブ派を押し付けられたと考えているので、その役割は大きい。

スルタンはリヤドではカローラに乗るなど質素な生活をしていて、全く豪族としての気配は感じられなかった。しかし、やはり只者ではなかった。サウジ人は、レジデンスのレセプションのファハドのように、それを肌で分かっていたのだろう。少なくとも只ならぬ気配を察知していたに違いない。

サウジは、出身部族、出自がその人の扱い、将来をかなり規定する社会なのだ。それで、今更ながら、シェイク・アリ・ムトラックがあのようにスルタンの話に乗って慎太郎と若者との間の議論の場を設けたわけが分かった。

イスラム教徒は、皆、平等で見ず知らずのものでも旧知の仲のように親しく振る舞う。それは、スルタンに連れられて何度か食事に招かれ、目の辺りにしていたので慎太郎にも良くわかっていた。

しかし、一歩踏み込み信頼感を得て本当に付き合うまでには時間も掛かるし容易なことではない。サウジ社会は、基本的に閉鎖的だし、サウジ人は大変用心深いのだ。

慎太郎は、スルタンのお蔭で徐々にサウジの生活を深く知ることになったが、何よりも、宗教界の重鎮、ロイヤルファミリーと知り合いになれたことは幸運だった。

焦らず、自然体でサウジに接したことも幸いしたのかも知れないと慎太郎は思っていた。

それに日本大使館の林の助けも加わり、慎太郎は難なく政財界の重鎮と会うことが出来るようになった。

このように慎太郎が仕事に生活にと順調になり始めたのとは裏腹に、灼熱の国と化したサウジでは恐ろしい出来事が始まるうとしていた。

沙漠のサソリが再び、いや、より激しく新たな形のテロを次々と起こしてきたのだ。

特定の建物などを狙うだけではなく、一般市民いわゆるソフトターゲットを無差別に狙ったテロ事件も加えその攻撃を一層活発化させてきた。